新聞で学ぼう

将棋のルーツ 分かる「酔象」

平安時代の将棋の駒が先日、奈良市の遺跡で発掘されました。900年もの昔に遊ばれていた将棋には、歩や桂馬に交じって「酔象」という聞き慣れない駒が使われていました。酔象とは一体どんな駒なのか、調べてみると将棋の祖先が見えてきました。

奈良市の興福寺旧境内から出土した「酔象」と書かれた駒

なるほどランド

1 出土の駒

平安後期には使われた

駒が出土したのは興福寺の昔の敷地。井戸の中から歩、桂馬、酔象が一枚ずつと何が書かれていたのか不明の一枚の計四枚が見つかりました。発掘調査を担当した奈良県立橿原考古学研究所の鈴木一議主任研究員は「一緒に出土した木簡に書かれた承徳二（一〇九八）年ごろの駒と考えられます」と話します。お坊さんが指していたのかも。

遺跡で発掘された将棋の駒は出土駒と呼ばれます。山形県天童市の市将棋資料館のまとめによると、出土駒は福井や静岡など本州各地で見つかっていて、駒の組み合わせなどから将棋のルーツを調べる手掛かりとなっています。

今回の発見は、これまで知られていた酔象の駒より二百五十年も古く、平安時代後期には酔象が使われていたことが、明らかになりました。

将棋の歴史に詳しいプロ棋士の大内延介九段は「大きな発見です」と言います。さまざまな変遷をたどって将棋が現在の九×九マス、四十枚の駒を使うようになったのは戦国時代ごろ。それまでは、王将の上に酔象を配置した四十二枚を使用していました。

2 再使用で

勝負長引き 外すことに

将棋の起源は古代インドのボードゲーム「チャトランガ」とされ、西洋に伝わって「チェス」に、東洋で「中国将棋」になったといわれています。日本への伝来は、中国や朝鮮から入ってきた説、タイなど東南アジアからやってきたなどの説があります。

日本に入ってきてからについて、大内九段の説では平安時代には身分の高い人たちが将棋を指し、駒の枚数の少ない「小将棋」と、将棋盤の升目も駒の枚数も多い将棋に分かれたといいます。「三百枚以上の駒を使う将棋もありましたが、洗練されて余分な駒はなくなりました」と大内九段。いくつもの大きな将棋では「中将棋」が残りました。

現在の将棋の元となったのは小将棋で、中将棋の駒だった飛車と角を取り入れて、よりダイナミックな動きに。また、チェスにも中国将棋にもない日本独自の駒の再使用というルールも編みだされました。大内九段は「昨日まで敵だった駒を味方として使う、日本人のおおらかさを感じますね」と解説します。

しかし、再使用のルールによって酔象が問題になりました。というのも、酔象が相手陣地に入ると「太子」に成るのです。太子とは後継者、つまり王将が取られても負けない駒です。駒が再使用できると、敵陣内に酔象を打って太子がつくりやすくなってしまいます。そこで、やたら勝負が長引くことのないよう、酔象が取り除かれたとみています。

3 今も残る

愛好家復活の中将棋に

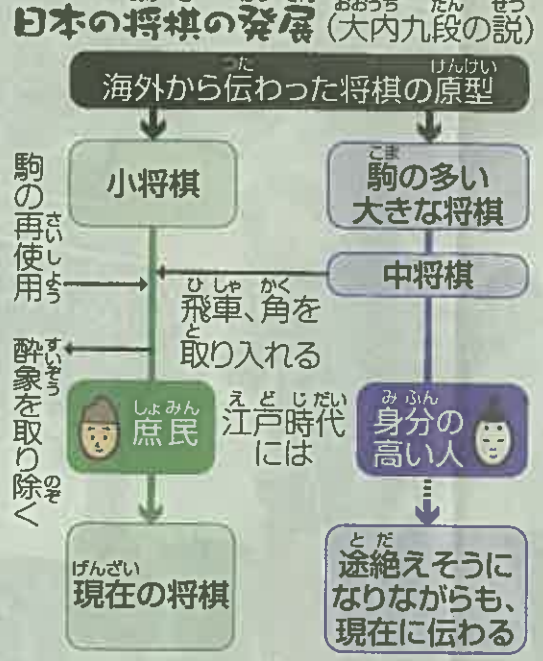
将棋の親戚にあたる中将棋には、今でも酔象が残ります。中将棋は一時期、ほとんど途絶えてしまいましたが、最近少しずつ息を吹き返しています。中将棋には、金銀より動ける範囲が狭い「銅将」、後戻りできる香車のような「反車」、飛車と角の動きを合わせた「奔王」、一回で二手動かせる「獅子」など個性的な駒がたくさん。取った駒は再使用できません。

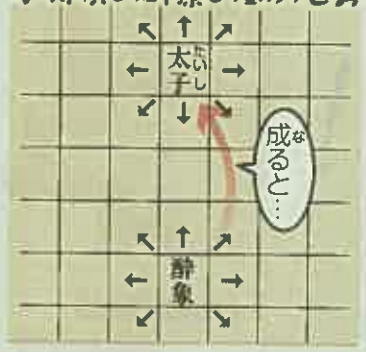
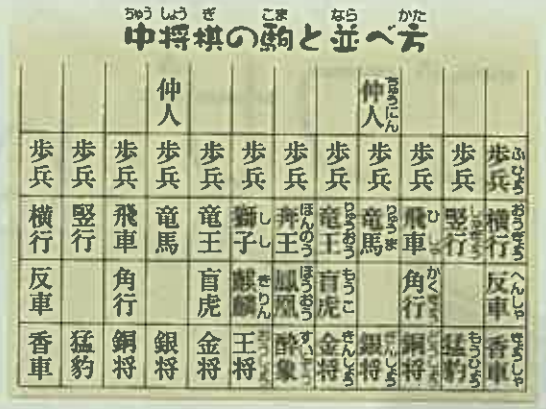
愛好家たちでつくる日本中将棋連盟の会長で、名古屋大の武田穣教授によると、最近はプロの棋士でも指す人が現れ、競技人口は全国で百人ぐらい。「イギリスやアメリカ、フランス人で指す人もいますよ」と武田教授。インターネットで対局できるようになったのが、復活の要因です。

インターネットでは、新しい将棋も登場しています。名古屋市出身の東京工業大大学院生の有田夏洋さんは変則ルールの将棋が遊べるホームページ「将棋ったー」を作っています。

「高校時代に将棋部の仲間と息抜きで指した変則ルールをまた楽しみたくて」と作った理由を明かします。ダイヤモンド将棋や金縛り将棋、どんでん返しなどユニークなタイトルとルールの将棋約百種類が楽しめます。

いろんな方法で対局できる将棋。大内九段は「将棋や碁は考える力を鍛えてくれます。特定の駒に愛着が湧くくらい将棋好きになるといいですね」と話していました。



今も中将棋で使われている酔象の駒を持つ武田穣教授＝名古屋市千種区の名古屋大で

自作のホームページ「将棋ったー」の画面を示す有田夏洋さん＝東京都目黒区で